

発行日 2007年6月20日(隔月20日発行) 通巻260号 1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報  
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

# Trial & Error

No.260

July-August 2007

特集

## アジア開発銀行の「開発」とは

～ラオスの事例から～

第8回 JVC 会員総会 報告



Japan International Volunteer Center

## 【アジア開発銀行

(Asian Development Bank)

アジア太平洋地域の経済発展を目的に六六年に設立された地域開発金融機関。六十七カ国・地域が参加し、アジア各国の道路やダムなどの開発事業に融資を行なうことで開発途上国の経済成長を促進、貧困を削減しようとしている。本部はマニラ。

日本はアメリカと並んで最大の出資国。歴代の総裁はすべて日本人で、歴代の総裁八人のうち一人を除いて財務省から出ている。現総裁は黒田東彦元財務官。予算・人事局長、戦略・政策局長など主要ポストの多くも日本人で占められている。

ADB内におかれたアジア開発基金などさまざまな基金でも日本は最大の拠出国である。そのため発言力も強く、日本の、それも財務当局の影響下にある国際機関と言つてよい。

主な業務は、対象国・地域の開発プロジェクトに対する貸付や直接投資、保証業務。開発にあつたての政策的助言や技術援助も行なっている。プロジェクトはダムや灌漑、発電所、道路の建設といった社会・経済インフラ建設が中心を占めている。

ADBはこうした巨大インフラ開発を通して貧困を削減して

### 特集

# アジア開発銀行の「開発」とは ～ラオスの事例から～

## ラオスにおける

## ADB支援による開発

ラオス事務所

調査研究担当

グレン・ハント



■プロフィール  
ラオスの森林分野における日本による開発を焦点に調査研究を実施。〇四～〇七年、農村地域におけるさまざまなセクターによる開発問題について研究を実施。JVCには〇四年から参加。現在、豪マツコリー大学博士課程。オーストラリア人。

去る五月三～七日、京都にてアジア開発銀行（ADB）総会が開かれた。これに合わせて、世界各国のNGO（主にADBが支援するプロジェクトによって被害を受けているアジア諸国）や市民が参加しての市民フォーラムも同時に開催され、そこでは多くのワークショップが設けられていた。私はADB総会に対して開催されたこの市民フォーラムに参加する機会を得、さまざまな市民団体とともに、ADBが行なう開発についてラオスの農村地帯における経験を報告した。

ADB総会に参加した多くのNGOは、ADBに対して政策レベルのキャンペーンを行なっている。これらのNGOがADB政策や事業全体に対して分析や議論を行な

う一方で、ADBが支援したプロジェクトが農村地域に深刻な影響を及ぼしている事例を、地域に根ざした活動を行なうJVCのようなNGOが報告することはとても重要だ。政策提言を行なうNGOに対して、ADBは単にマクロの経済成長重視政策に基づいた理論上での議論をするが、JVCが今回ワークショップで提示したような農村地域における多大な影響（後述）のような草の根レベルの確たる証拠は、ADBも無視しようがない。JVCが示したこれらの証拠は、政策レベルで活動する多くのNGOがADBに改革や責任を果たすよう呼びかける際の立脚点ともなっている。

ラオスにおけるADBの主な政策は、GDPを増大させて政府の

国家収入を増加させるというものだが、ADBによるこうした経済成長や国家収入の追求の影で、環境や村人の生活への影響は無視され続けている。

JVCはラオスで森林保全を中心とした農村開発の活動を九三年から行なっているが、過去三年間の現地における活動の中で、私はADB支援の三つのプロジェクトに遭遇した。一つめは九八年に完成したトゥンヒンブン水力発電プロジェクト、二つめは九三～〇三年に実施された産業植林プロジェクト、三つ目は〇五年に建設が始まり〇八年完成予定のナムトゥン2水力発電プロジェクトである。ここでは前二者について報告する。

### 事例①・トゥンヒンブン水力発電プロジェクト

今回の市民フォーラムでのワークショップで、私はこのトゥンヒ

ンブン水力発電プロジェクトに焦点を当てて報告した。

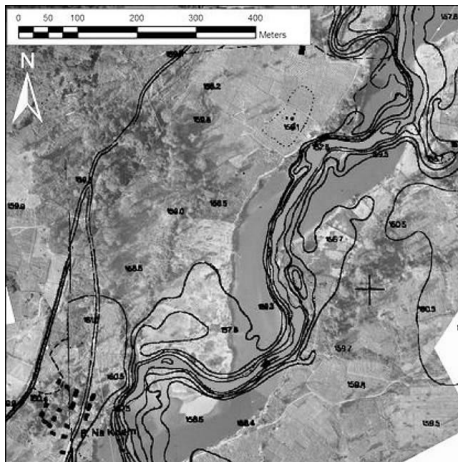
JVCはラオス・カムアン県七郡にて農村開発を行なっているが、

いくとしているが、現実には貧富の差の拡大、人々の生活基盤や環境の破壊といった負の側面が目立つ。これらは、開発のためにそれまでの人々の暮らしの基盤となっていた森や水、土地の共同利用を崩し、私的所有を進め、市場経済を導入するという手法が必然的に生み出す問題である。

五月上旬に京都で行なわれた今回のADB総会では、アジア全域からNGOや住民グループが駆けつけ、ADBのプロジェクトが引き起こしている問題に抗議と批判をぶつけた。周辺一帯の村々を水没させたパキスタンにおける大規模灌漑事業、大規模な住民移転と人権侵害を引き起こしているバングラディッシュのフルバリ石炭採掘事業、貧困者への水のアクセスを奪ったマニラやジャカルタの水道民営化事業、公害病患者を続出させているタイ北部の火力発電所建設、など枚挙に暇がない。

JVCが関係しているインドシナ地域でも、メコン川流域の経済発展を目的とした大メコン圏(GMS)経済協力計画を九二年以降進めている。近年は、域内の物流改善のための大規模なインフラ整備(経済回廊)の形成を強力に推進してきた。

(農業ジャーナリスト 大野和興)



■ヒンブン川下流域では、水量の増加によって土壌侵食が大規模に発生している。上図はその例。線図が以前の河川、写真が現在。川幅が広くなり、かつ直線的になっているのがわかる。



■ダムによる増水によって、何週間も村は水浸しになっている。

この一つに県北西部のヒンブン郡がある。トゥンヒンブン水力発電ダムはこの郡にあり、森林や農村開発の活動を行なう中で出会った村人たちから、JVCはこのダムによる何年にもわたる影響について聞くことになった。

トゥンヒンブン水力発電プロジェクトは、最大で毎秒一〇立方メートルの水量をナムトゥン川からヒンブン川に転流させて発電させるもので、発電した電気はタイに販売される。電力会社は民間企業として運営され、九八年から〇三年の間に合計で二億七千五百万ドルの収入をあげており、とても収益性の高いものである。

しかし、ヒンブン川や下流域に暮らす農村地域の人々にとっては、これは災害以外の何者でもない。JVCが活動する村では、水量の増加によって一カ月以上に渡る長期の洪水に苦しんでいる。また、昨年訪問したある村では、過去六年間の洪水によってコメが取れなくなったため、以前は高い収量を得ていた水田を完全に放棄せざるを得なくなっていた。川の近くで暮らす村人は家畜を病気で失い、乾季には野菜栽培が可能だった河岸も土壌侵食で失った。

これらの影響を受けた多数の村人は、ADBや電力会社からはプロジェクトにより影響を受けた被災住民とは見られていない。なぜなら、彼らはヒンブン川支流に位置しており、ヒンブン川本流の村人のみがプロジェクト被災住民とされているためだ。

この水田放棄はヒンブン川全域に見られており、その支流でも同じ状況となっているが、事業を実施しているADBや電力会社からはほとんど考慮されていない。最近のある科学的調査によれば、この毎秒一〇立方メートルの水量増加がヒンブン川の河岸の土壌侵食を引き起こし、下流に蓄積された砂が村の洪水の原因になって、ヒンブン川や支流域における広範囲の水田放棄につながっていることを報告した。

ほとんど壊滅的と言っている水田の消失により、村人は深刻な困難に直面している。現在、村人は高地焼畑農業を行なっているが、これはラオス政府により禁止されているために、彼らは周囲の自然資源に今まで以上に頼らざるを得なくなっている。ある村人は、水田消失でコメの収穫がなくなったために、違法とされている野生動物の取引に手を出さざるを得ないと話していた。こうした野生動物は中国やベトナムの商人により購入されている。

また、さらなる警鐘として、多くの若者がタイに違法な出稼ぎに出

## トゥンヒンブン水力発電プロジェクト 概要

【所在地】ラオス中部・ボリカムサイ県、カムアン県

【ダムの形態】大きな貯水池を作らず、河川を転流させる「流れ込み方式」

【発電量】210メガワット

【実施機関】トゥンヒンブン電力会社(THPC)。ラオス電力会社(60%)、ノルディック電力会社(ノルウェー、20%)、MDX社(タイ、20%)による合弁企業。ラオスにおける初の民間企業による運営。

【資金供与】ADBから6,000万ドル、ノルウェー政府、民間企業の投資および銀行融資で、総計2億6,000万ドル。



村人たちが知らないうちに、植林会社(ADB からの融資あり)が事業許可を行政から取得、その後、80ヘクタールに渡ってユーカリの植林が行なわれたナボー村。写真は植林されたユーカリ。下にあげるように、問題が多い事例。

- ・そもそも植林地の選定基準が不透明
- ・土地取得のプロセスに村人が参加していない
- ・造林労働者に対する賃金が未払い
- ・取得に対する村人への補償が今も不履行のまま

日本のNGOは、財務省との定期協議の場を持っている。06年6月、その場で、JVCはADB産業植林プロジェクトの問題点を指摘し、ADBへの多額の資金拠出をしている財務省に対して懸念を表明した。

## 事例②・産業植林プロジェクト

していることがあげられる。ある村では、人口の六分の一がタイに出ているという。

ラオスの首都ビエンチャン在住の環境科学者によれば、このプロジェクトにおける村人の経済損失の推定は過去八年の累計で八百〇

一千三百万ドルに上るといふ(一家族につき毎年三百ドルの損失)。その一方で、電力会社やADBを含めた資金提供者は、村人への社会的・経済的な影響を無視し続け、彼らの代償の上に経済成長を促進しつつづけている。

ADBは経済成長戦略の一環として、ラオスにおける産業植林を強力に推進してきた。その主なものに、九三〇三年に実施された産業植林プロジェクトがある。このプロジェクトはADB自身によって「不成功」と評価されている。〇五年十二月の業務評価局による報告では、「失敗した植林への貸付ローンを返済せねばならず、人々はさらなる貧困に追い詰められていることから、計画していた受益者の社会経済状況の改善に失敗した」とこの事業を報告している。しかし、農村における深刻な影響を「不成功」と評するだけで終わらせてしまつてよいのだろうか。

このプロジェクトは、農村住民や投資家、企業が小規模なユーカリ植林を行なうことができるように、苗木や化学肥料の購入のためにローンを提供していた。

### 産業植林プロジェクト 概要

- 【プロジェクト期間】 93～03年
- 【規模】 中南部4県で9,000ヘクタールを植林(土地法における「荒廃林」を対象とする)
- 【実施形態】 ①小規模農家や企業への融資、②パイロット植林、③植林地にアクセスするための道路建設、④政府機関の能力向上・環境政策の改善
- 【実施機関】 農業振興銀行、ラオス林野局、ラオス銀行
- 【資金供与】 ADBから1,120万ドル

今からさかのぼること三年弱、ADBは、〇四年八月に首都ビエンチャンにて「多国籍製紙企業に対して、ラオスにおける投資機会を提供する」目的で、民間企業へのワークショップを開催している。ブアソーン・ラオス首相は今回の土地収用

な数百万ドルに上る負債を抱えてこの銀行は倒産状態にある。植林の経験も無く、植え方や管理のトレーニングを受ける機会も無かった村人も、数百〇数千ドルの負債を抱えており、生産性の低い植林ではローンを返済できないでいる。

このプロジェクトや他の植林事業に関するもう一つの問題は、しばしば、村人から森や農地を補償無しで失なわされていることにある。植林における雇用創出を村人の利益として謳っているが、ほとんどそのような利益は無い。

植林によって村の土地を失う例はラオス全土で起きており、近年、危機的状況にも及んでいる。このため、今年五月十日にラオス政府は植林事業などのための民間企業への土地収用の認可に対して、即時停止を発表した。

認可停止の発表の中で、「国内で土地管理に関して多くの問題が起きている」と述べている。もしそのような土地問題がラオス全国に渡って起きているのであれば、ADBによる前述のラオスへの植林投資の推進は何を意味しているのだろうか？

これは、ADBが経済成長しか考慮していないことが原因だと私は考えている。この意味において、JVCのような草の根で活動している団体が京都における市民フォーラムのような場で村人の声を伝えることができたことは、非常に重要だ。こうした報告によって、一般の人々もその支援プロジェクトの裏で村人が直面している現実の困難に気づくことができるだろう。そうした村人の声だけが、ADBに資金を拠出している日本やオーストラリアのような国々の市民を突き動かすのだと考える。農村地域の人々の権利を尊重し、村の貧しい人々の生活を壊さないようその戦略を変えるように、私たち先進国の人々はADBに対して働きかける義務があるのではないだろうか。

# 誰のための「参加」と「持続性」か

「開発に「人権」という枠組みを」

東京事務所  
調査研究・政策提言担当 高橋 清貴



■プロフィール  
大学卒業ののち、青年海外協力隊員、開発コンサルタント勤務。その後、留学して社会人類学修士、博士課程。九十六年より現職。農村金融、ODA改革、国連改革、軍と人道支援の関係などに関わる。〇五年より恵泉女学園大学助教授を兼任。

今年のアジア開発銀行（ADB）

の年次総会において、黒田総裁はその開会スピーチで二つのことを強調していた。InclusivenessとSustainability（「参加」と「持続性」）である。この二つの言葉は、私たちNGOも住民の参加を促し、社会や環境に配慮した開発を促すものとしてよく使われる。しかし、黒田氏のそれはNGOの考えとはまったく違っていた。ADBが重視しているのは、民間企業の「参加」を促し、それによって経済成長を「持続性」あるものにしよということとであり、すなわちADBはこれからもっと企業との連携を深め、経済成長路線を適進しますよという宣言であった。

ADBの場合、焦点はインフラである。別のセミナーで黒田総裁は、「アジアには今後十年間で三兆ドル（約三百兆円）のインフラ・ニーズがある」と述べた。まだまだADBの存在価値があることを訴えたのである。しかし残念なこと

に、企業中心の「開発」が、これまで環境や人権にどのような負荷を与え、新たな貧困を作ってきたかという点への真摯な検証と反省は聞かれなかった。JVCは、ラオスや他のアジア諸国でADBの行なう「開発」の現場を見てきたが、黒田氏やADBがまやかしの「参加」や「持続性」を使い続けることに懸念を感じざるを得ない。

今回、JVCはアクション・エイドとオックスファムという二つの国際NGOと協力して「ADBと自然資源管理」というワークショップを企画したが、黒田氏がこのようなスピーチをした後だけにまさしくタイムリーであった。「参加」と「持続性」という言葉を現場から問い直すには、JVCの活動地であるラオスでの事例は格好の材料となる。ラオスでは、住民の自然資源への依存度が高いにも関わらず、グレン氏が書いているように真の住民の参加などなく、持続可能な形で開発が進められて

いるとは言い難いからである。

今回のワークショップでは、ラオスの他にオックスファムがカンボジアの、アクション・エイドがベトナムの事例を提示した。いずれにも共通している問題は、プロセスあるいは手続きの重要性である。経済成長を続けていこうとするならば、今後もアジアで森林や鉱物資源への需要は高まるばかりであろう。そして、ますます自然環境への負荷は増し、先住民民族など地域住民の生活のあり方を強制的に転換させる契機が現れてくることは必至であろう。ワークショップでは、こうした問題意識から出発して、参加者と意見交換を交わし、次のようなことが提案された。

▼温暖化問題は、過剰な資源を消費する先進国のライフスタイルを根本的に見直さなければ本当の解決はない。「持続性」はそういう哲学を含んだ言葉である。

▼「貧困」という言葉は、介入の正当化に使われ、住民の強制移転な

どは単なる「コスト」となる。しかし、開発が本当に「貧困層」のためならば、移転を余儀なくされた村人たちの生活が、単なる現状維持ではなく、改善に結びつくものでなければならない。

▼自然環境はシステムとして体系的につながっている。一カ所の負荷は他所にも影響を及ぼす。その「累積的インパクト」についても考えられるべきである。

▼地域住民は長年にわたって自らの資源を自主的に持続的に管理してきた歴史を持つ。ADBは、地域住民による管理を側面から助けるような支援を考えるべきである。

▼開発はプロセスが重要である。外部から開発のために介入しようとするならば、地域住民に対して「自由な発言が許され、事前に十分な情報が提供された形での協議」という手続きを保証するものでなければならない。

こうした提案はADBだけではなく、世界銀行やアフリカ開発銀行、インフラ中心、円借款中心の日本のODAにこそ当てはめるべき課題であろう。「参加」や「持続性の確保」は、自然資源に依存して生活を成り立たせている地域住民からすれば「基本的な人権」であり、「生存権」に直結する。すべての開発は「人権」というフレームワークの中で行なわれなければならない。

## パレスチナ・ガザ緊急支援活動終了報告

パレスチナ事業担当 藤屋 リカ



## ■経済危機が栄養失調に直結

JVCは、ハマス政権の発足に伴う制裁を発端とした深刻な経済危機に陥ったパレスチナ・ガザ地区での緊急支援を〇六年五月から開始しました（詳しくは左表及び本誌二百五十四号参照）。主な支援内容は、子どもの栄養を専門とする現地のNGO「人間の大地」の二センターを拠点として、中等度・重度の栄養失調児への栄養食の提供（週三日、一日一度）と、母親への栄養指導、そして親子がセンターに来るための交通費の支援でした。

栄養食は地区内で入手できる季節の新鮮な食材を用い、母親には自宅で作れる栄養食の作り方や栄養についての情報を提供しました。経済危機によって栄養失調児が増し、ほとんどの家族はセンターに通う交通費さえ捻出できなくなつたため、「栄養食、情報提供、交通費」セットでの支援を実施したわけです。

## ■いつまで「緊急支援」を？

当初三カ月の予定で支援を開始しましたが、その都度状況を鑑みて二度延長し、〇七年三月末に終了しました。延べで約一九、二〇〇人、一日平均七十三人の栄養失調児に対しての支援を実施しました。

〇七年二月にノーハちゃんが最初にセンターに来た時は、月齢七・五カ月なのに体重は四・五キロで二カ月児ほどしかなく、重度の栄養失調と診断されました（写真右側）。彼女はそこからセンターに通って栄養を取り、その母親は栄養指導を受けることになりました。一カ月後には体重が一・三五キロ

も増え（写真左側）、その後も順調に回復していききました。母親がとても熱心で、センターで習ったことをすべて自宅で実践したことが大きかったのです。

軍事侵攻によって社会状況が著しく悪化した時期には、ケアを受けている子どもでさえ回復が見られないこともありましたが、しかしその後は、多くの子どもは六〜九週間のケアを受けると、正常、あるいは月一回の検診で心配ない程度の栄養状態に回復していききました。長期化する紛争状況のなかでは、緊急支援活動は「いつ終了するのか」を常に問われます。子どもたちが栄養を必要とする状況が今もなくなつたわけではないのです。この点について「人間の大地」の代表と何度も話し合い、「緊急」支援の延長を重ねるのではなく、厳しい

状況の中でも自分たちで何かできる力を身につけていくことの大切さを確認しました。そして、JVCからの支援を終了させることにしました。今後、「人間の大地」は独自に資金を調達し、内容を検討しながら支援を継続していくこと、そして母親たちが自分で収入を得て子どもをケアしてもらええる仕組みも考えていく、ということになりました。外部からの支援に頼るだけでなく、まずは身近で実現性の高い方法（例えば母親がセンターでの作業補助に従事するなど）を模索することから始めています。

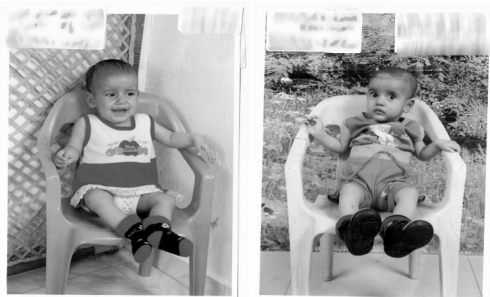
## ■希望を失わせないために

紛争地での緊急支援では、根本的な問題が解決しない限り支援の終わりが見えないのが実情です。栄養支援を含む人道支援だけではなく、根源に関わる政治的課題の解決が必要とされます。今回の緊急支援は、それ自体の限界を認識しつつも、私たちと共にある人々の命と希望が守られるために、そして人々自身が持つ力を最大限活かせるようになるように、と願いながらの活動となりました。

緊急支援としては終了しましたが、厳しい状況が続くガザ地区において、〇三年から実施しているガザ地区での幼稚園を拠点にした栄養支援を続けていきます。

表1・社会状況と支援の推移

|           | 社会状況                                    | 支援状況                        |
|-----------|-----------------------------------------|-----------------------------|
| 06年<br>5月 | パレスチナ経済危機の報告（世界銀行、国際NGO）                | 緊急栄養支援開始・ガザセンターにて（7月末までの予定） |
| 6月        | イスラエル軍、ガザ地区侵攻                           | ハンユニスセンターにも支援拡大             |
| 7月        | 軍事攻撃によるインフラの破壊                          | ニーズの高まりに伴い支援延長を決定（11月末まで）   |
| 8月        | 軍事攻撃が続く                                 |                             |
| 9月        | 公務員の給与未払いに対するストライキが頻発                   |                             |
| 10月       |                                         | 支援再延長の決定（07年3月末まで）          |
| 11月       | イスラエル軍、ガザ地区より撤退                         | 緊急支援終了の方向性の確定               |
| 07年<br>2月 | メッカ合意、パレスチナ自治政府再編（内部混乱の解決、国際社会の支援再開に期待） | 3月末までの支援終了を決定               |
| 3月        |                                         | 支援終了                        |



■ノーハちゃんの写真。右がセンターにきた直後、左がその1ヵ月後。あきらかに健康そうになった。



■トゥオンさん家の裏の斜面。等高線にそってきれいに植えられているのがわかる。



■みかんの苗木を植える。ご近所同士でお互いの成長具合を確認するのが楽しいそうだ。



■フロージャの成長を確認するトゥオンさん

その地に  
生きる人々

1

ベトナム ホアビン省 タンラック郡 ナムソン村

## トゥオンさん

経済発展目覚ましいベトナム。しかし、農村に住む村人たちの暮らしには、様々な変化が起きています。変化の中に生きる、ある村人に話を聞きました。（編集部）

### ベトナム ホアビン省での活動

ベトナム北西部山岳地域にあたるホアビン省タンラック郡は、人口の8割以上が農業を営む。

この地域は政府による貧困削減政策の対象となっており、農家への支援策もあるが、外来種の導入や情報提供の不足などからうまくいかない例も見られる。人々の暮らしのセーフティネットとして機能してきた豊かな森や小川の恵みは、人口増加や現金収入源として伐採などから減少が続き、林産物も採りづらくなっている。

JVCは、村作り委員会を設置し、土壌流出防止のための等高線農業や植林、食料自給のための家庭菜園や稲作の研修などを実施してきた。また、郡行政とも話し合いの場を持ち、環境への配慮を訴えてきた。

子どもや孫に、  
みかんを食べさせたい。  
美味しい

トゥオンさんは五人の子どもを持つお母さんだ。自宅の裏がすぐ山の斜面になっているが、そこに生えている木々が年々少なくなっていることから、土砂が崩れてくることを以前から心配していた。そこで、JVCが実施している等高線農業の研修に参加し、少しずつ傾斜地の利用を改善してきた。土止めには有効なフロージャ（根が土に深く張るマメ科の植物で、この土地の植生とも合っている）を斜面に段々に植えていくのは、容易ではない。しかし努力の甲斐あって、数年たった今では、水平にきれいに植えられているのが遠くからでも確認できるまでになった（写真左上）。他

の村人から裏の「段々畑」について相談を受けることもあるそうだ。○六年、JVCは日本の有機みかん農家の吉田浩司さんとナムソン村との経験交流を実施した。その後、彼女は自分のみかんの木を朝と夕方、見回るようになった。「彼の話を聞いて、病害虫を防いで木が元気に育つように、ね」村に道路ができてから、行政が推進している化学肥料を投入して、みかんの増収を試みる村人たちも出てきている。しかし、彼女は自然なやり方で栽培し、今後子どもや孫に美味しいみかんを食べさせたいと考えている。



# 第八回JVC会員総会報告

会報誌レイアウト／総務担当 細野 純也

○七年六月九日、第八回JVC会員総会が東京・池袋で開催されました。六十八名の正会員が出席され、委任状と合わせて定足数を満たしました。

最初に、昨年十月から代表に就任した谷山博史から挨拶がありました。私たちが現在どのような時代に生きているのか、政治状況や環境に対する各種の取り組みとその意味、そして各地の紛争を取り上げ、それらが私たち自身の暮らしとどのように関わっているのかを提示しました。

そして、NGOであるJVCが今後もオルタナティブを提示していくことの重要性を説明しましたが、過去にも増してそれが難しい時代に差し掛かっていること、だからこそ、仲間である会員とともに支えあい考えていきたい、という表明がありました。

## ■議案①・

### ○六年度活動報告・決算報告

まず事務局長の清水俊弘から、○六年度の報告の概要を確認しました。国内におけるNPO／NGOセクターの規模を提示し、今まで以上に責任ある活動が求められていること、そして○六年度当初のJVCの各地の活動における視点を確認しました。

続いて、事務局の川合千穂、下田寛典、細野純也が、地域開発活動、人道支援活動、国内活動につ

いてそれぞれ報告を行ないました。その後、経理担当の香取佐和子から決算報告があり、続いて監事の樋口達から決算は適正に実施されているとの監査報告がありました。しかしながら今後の課題として、海外事務所の会計報告の検証がしきれていない現状にあり、信頼性を高めるといふ意味で今後改善していくべき、と指摘がありました。その後に質疑応答を行ない、報告・決算は承認されました。

## ■議案②・

### ○七年度活動計画・予算案

はじめに代表の谷山から、○七年度の計画に関して、世界の状況とそれに対するJVCの視点と取り組み、そして組織としての抱えている課題の認識を提示しました。

続いて、事務局の鈴木まり、藤屋リカ、荻野洋子から、地域開発活動、人道支援活動、国内活動の各計画について説明しました。予算案の説明を香取から行ないました。その後に質疑応答を行ない、計画・予算は承認されました。

活発な意見交換がなされ、スタッフと会員が世界の課題に共に取り組んでいこう、と改めて感じられた総会だったと思います。

## 07年度計画・予算に関する質疑応答

- 質問①・G8サミットNGOフォーラムに関して、JVCのスタンスは？  
▼「人権と平和」ユニットに積極的に関わっていく。多くのNGOが分野を越えて大同団結したことが重要だと考えている。※十五ページも参照
- 質問②・郵政省ポランティア貯金に関して、以前予算通りに確保できなかった例があったと記憶しているが、今年度は大丈夫か？  
▼相手方とも話をしており、今回はほぼ大丈夫と手応えがある。
- 質問③・他団体ではクレジットカードでの募金の例もあるが、検討できないか？  
▼今後検討していく。
- 質問④・現地での活動が終了した後、人々へのアフターケアなどの考えは？  
▼すべての活動ではないが、フォローアップ活動としてスタッフが時々現地を訪れるようにしている。
- 質問⑤・アフガニスタンでの活動の「教授法ワークショップ」とは何か？  
▼新しい教科書と指導書が配布されたので、その有効な利用方法についてのワークショップを小学校の先生を対象に実施している。
- 質問⑥・イラクに関して、国際NGOとして今後どう関わるかの考え方は？  
▼現地の状況は厳しくなる一方であり、バグダッドでは住民はますます生活しづらくなっている。連絡自体も難しい。しかし、その状況を日本に発信すること、関わり続けることの重要性は変わらない。
- 質問⑦・自己資金の重要性に関して、補助金の比率を改善する場合の目標はあるか？  
▼以前からの目標である、「政府系資金を全体の2割に」を目指す。
- 質問⑧・緊急関係ではなく、「JVCらしさ」を資金調達につなげる計画案があるか？  
▼昨年度から準備してきた「アジアこはん基金」を設置。生協や消費者運動をしている方々など、ともに共感できる人々とながっていききたい。

## 06年度報告・決算に関する質疑応答

- 質問①・最近スタディーツアーは実施しないのか？  
▼タイに関しては○六年度は現地活動に集中したために実施できなかった。○七年度は体験や交流を重視した形で八月に実施の予定。
- 質問②・以前のような体験型の会員の集いを実施できないか？  
▼コスト面から会員担当を専任で置けない人的事情がある。一方、ボランティア発案ではあるが七月に合宿が企画されている。
- 質問③・南アの活動における協働団体の不正会計に関する詳細を？  
▼協働団体のスタッフ経由で在宅看護ボランティアへの手当支払いを行なっていたが、これを着服された。現地の警察に届け、現在は民事訴訟を進めている。詳細は本誌二百五十号の報告を参照してもらいたい。
- 質問④・会員数の減少（○六年度は約百十名の減少）に対する対策は？  
▼会費が支払われなまま、しかたなく退会扱いにする場合が多い。会費支払いのお願いに一言添える工夫をすると共に、会員が関東圏に集中しがちなので、谷山代表の地方講演を企画中。
- 質問⑤・JVCが送付した政府への公開質問状には回答がくるのか？  
▼回答は返さなければならぬ。しかし、こちらの聞きたいことに正確に答えてくるとは限らない。回答も含めてHPで公開している。
- 質問⑥・（会場からのコメント）JVCが出した公開質問状は、本来は政党が出すべきものだと思うが、それができていない。それをJVCが出してくれることは頼もしい。  
▼補助金の収入が予算に対して大幅に少ない理由は？  
▼主な理由は、スーダンにおけるUNHCR（国連高等弁務官事務所）との契約が遅れ、年度内の事業規模が縮小したため。
- 質問⑦・南ア不正事件の被害額は？ また、シエラとの共同事業だが、被害の振り分けはどうなっているか？ 本事業の報告会を実施する予定は？  
▼被害額は約四十万円。資金調達経路上、すべてJVCからの支出分。また、訴訟による返金を見込んでるので、振り分けは考えていない。報告会はシエラと連携して今後実施する予定。

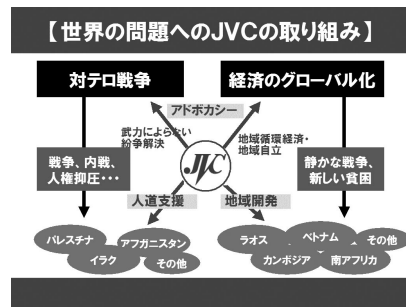




■会場の様子。60名以上の参加者が、説明に熱心に聞き入っていた。



■会場からの質問に答える谷山。



■07年度計画の最初に、谷山が提示した図。各現地における活動と共に、問題の根本である「対テロ戦争」「経済のグローバル化」に対して、オルタナティブを提示することでアドボカシーを実施する、というJVCの特徴が確認できる。

同時開催

## JVC 会員の集い

今年も会員総会の午後に、会員の集いを開催しました。今年は3つの分科会に分かれました。各会の参加者から報告していただきました。



■検問所でIDを見せる住民役の参加者(中央)。通れるかどうかは兵士役の参加者(左、後姿)の一言にかかっている。

せるいい機会になったと思います。

パレスチナボランティアチーム 藤井猛史

パレスチナの  
人々の厳しい生  
活の一端を垣間  
見るワーク  
ショップを行な  
いました。参加者は壁に見立てた  
机に囲まれ、学校や病院やお店な  
どの日常生活に必要な場所に行く  
には検問所を通過しなければなり  
ません。そこには兵士役の某君  
の厳しい尋問が待っています。曜  
日や年齢など、なにかと理不尽な  
理由をつけて通過を認めてくれま  
せん。外出禁止令が出されると、  
家でじっとしていなければなりま  
せん。ゲームではあっても、自由  
に移動できないつらさを味わいま  
した。現地の人々のつらさ、悔し  
さはどれほどのものでしょうか。  
ボランティアチームに参加して  
半年余り。今回のワークショップ  
は、第三次中東戦争から四十年を  
迎えたこの六月に、遠くに住むパ  
レスチナの人々のことに思いを寄  
せるいい機会  
になったと思  
います。



### ワークショップ

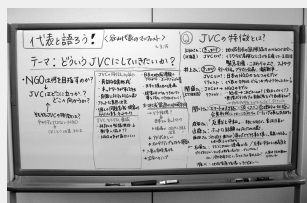
#### 「パレスチナの今」

藤井猛史

### 座談会

#### 「谷山代表と語ろう」

会員 瀬川智子



■会を通してとられたメモ。入会したきっかけも、JVCへの思いも十人十色でした。

重要なことのよう  
に感じました。

「JVCらしさとは？」を主題に、JVCの特徴や入会動機を十二名の参加者が語っては谷山代表にコメントいただくという対話形式でした。一同が感銘を受けたのが、八三年頃にJVC事務所で寝泊まりしていたというAさんのお話。二十数年ぶりに再会したJVCは、職員の大半が入り替わってもなお組織文化として民主的な意思決定への強いこだわり、フットワークの軽さ、(良い意味での)泥臭さが特徴として継承されている事がわかり大変安堵した、とのことでした。

午前中の総会で提示された谷山ビジョンの中にあつた「JVCの他団体との差別化」を具現化するうえで、十年二十年と長い年月、会員として応援し続けている全国の会員の皆様の、JVCへ寄せる熱い思いを傾聴することは重要なことのように感じました。



### 座談会

#### 「現地スタッフが語るカンボジア、ラオスでの活動の日々」

会員 斎川啓子



■帰国した米倉(左)と新井。笑いの絶えなかった。

「大変だけど、大好き」というのが共通したお話、だったかな？

近所のおばさんたちとのおしゃべりがストレス解消、とはラオス駐在の新井さん。その中身は、どこでも同じ色恋話にご飯の献立。嬉しいことは十のうち一つくらいだけど、東京のものと濃さが違う！村人と仕事を離れてドンちゃんやる時が至福の時、と満面の笑み。

一方カンボジア代表の米倉さんは、代表という立場上、常にスタッフを持ち込む問題対応に追われて村に行く機会も少なく、嬉しいことは百のうち五くらい。でも、村人からの感謝の一言、そして、村人やスタッフとの交流があるから頑張れる、とのこと。

人を支えるのは、人との関係。きつとどこでも同じなんです。うね。盛りだくさんだったけど、「大変だけど、大好き」というのが共通したお話、だったかな？



## スタッフのひとりごと

### 蛇が出た！

スーダン 車両整備専門家 井谷 正吾



イラスト／かじの 倫子

仕事も終わる時間に、スタッフのビターレと雑談していた。

「暑いねー、昨日の夜も寝られなかったよ」「この1ヵ月、家の中では寝られない。みんなベッドを外に出してなんとか寝ている。イタニ、〇〇キャンプって知っているか?」「知ってるよ」「そうか、あそこには今、誰もいないぞ」「えっ、何で?」「大きな蛇が出たんだ。酔っ払った白人が外で寝ていて食われたらしい」「…食われたって?」「飲み込まれたんだ」「マジで!? うそーっ」「なあサイモン、知ってるか、名前はえーと…、パイソ

ンだ」「ああ、やつらは水辺に住んでいるんだ。4、5メートルはある」「そんなにでかいの?」「太さはこれくらいだ」と、両手で30センチぐらいの輪を作ってサイモンは言う。「普段はこれくらいだが、獲物を飲み込むとやつらの腹は自在にふくれるんだ」「人間が飲み込まれるの?」「やつらの尻尾の先は二股に分かれているんだ。体にかみついた後に尻尾を鼻の穴に突っ込んで窒息させ、巻きついて締め上げ骨を砕いてから飲み込むんだ。ああ恐ろしい」「(…あ然…)」「警備員も食われたらしい」「何、警備

員まで酒を飲んでいたのか。なんてこった」

この話、どこまで信じていいものか。情報通のビターレが言うのだから、話半分としてもパイソンという大蛇が出たのは間違いなさそうだ。しかし、この暑さでは確かめにそのキャンプに行ってみる元気も無い。そういうこともここジュバではあるのかも、と妙に納得してしまった。

## 『普通の国になりましょう』

みるよむきく



C・ダグラス・ラミス著 大月書店刊 1200円+税

もう五年も前になる。ラミスを口説いて「ダグラス・ラミス平和を紡ぐ旅」というのを仲間を募って一年間やった。あの九・一一の後の世界、アメリカの対テロ戦争が始まり、米軍がアフガニスタンに爆弾の雨を降らせていた。その一年後にはイラク侵略が始まり、日本では有事法制が議論され、海外派兵寸前まで来ていた。ラミスさんはすでに津田塾大学を退き、沖縄に在住、在野の政治学者としてさまざまな運動現場で人々とまじって動いていた。ラミスさんが一つだけ条件があると聞いた。当時三歳になる息子と海くんを連れての旅になるが、大丈夫か。「もちろんきちゃんと子守をつける」と返事をし、それから一年間、私が住む秩父からはじまり、長野、山形、山梨、東京都下、長崎、埼玉、京都など十カ所余りを訪ねる旅がはじまった。

悪ガキで講演の邪魔ばかりしていた海くんもあれから五歳歳を重ねた。この本を手にとって思ったのは、「ラミスさんは海くんを思い浮かべながら書いたのだな」ということであった。

それほどこの本はやさしく読める。同時にとてもなく奥が深い。国家という権力、戦争という行為が持つ意味を考えに考えぬき、ラミスさん特有の逆説的な論理を縦横に駆使しながら、「普通」とは何かを問いつめていく。この場合の「普通」とは、「軍隊を持つ国」「戦争ができる国」はこの世界では「普通」の国であり、これこそが「国際貢献」の最低条件なのだという、いまこの国を動かしている政治潮流が使う「政治言語」としての「普通」である。ラミスさんはこの「普通」の意味を次々とひっくり返し、政治言語としての「普通」から、普通の人々の「普通」に逆転させていく。その論理の展開はスリリングなほどだ。

この本は子どもも大人も、声に出して読んでほしいと思う。何人か集まって交代で一節ずつ読み、みんなで立ちどまって考え、話し合う、そんな読み方が似合っている本だ。

(農業ジャーナリスト 大野和興)

JVCは、現在10の国／地域で活動しています。

## タイ

### ■スマトラ島沖津波

#### 被災地支援

05年1月から開始したタイ南部津波被災地復興支援プロジェクトは今年3月末で終了。

在タイビルマ人労働者の子どもや教師への健康教育は実施団体である GHREDC が今後も常設の授業として継続する。ビルマ人の遺体返還政策キャンペーンのまとめとして、2月に「津波後の在タイ外国人労働者：教訓と経験、そして政策提言へ」というセミナーを開催。現地新聞に掲載されるなど成果が見え始めた。プロジェクト終了後も現地 NGO とのネットワークと交流を続けていく。(堤)

### ■農村派遣研修

07年度は日本人を対象に開発や持続可能な暮らしのあり方について、タイの農村滞在を通じて学ぶ研修プログラムの準備をする。その一環として05年度まで続いた東北タイでの活動の学びをより多くの人に提供するために、国内で5月9日から連続講座を開講している。(下田)

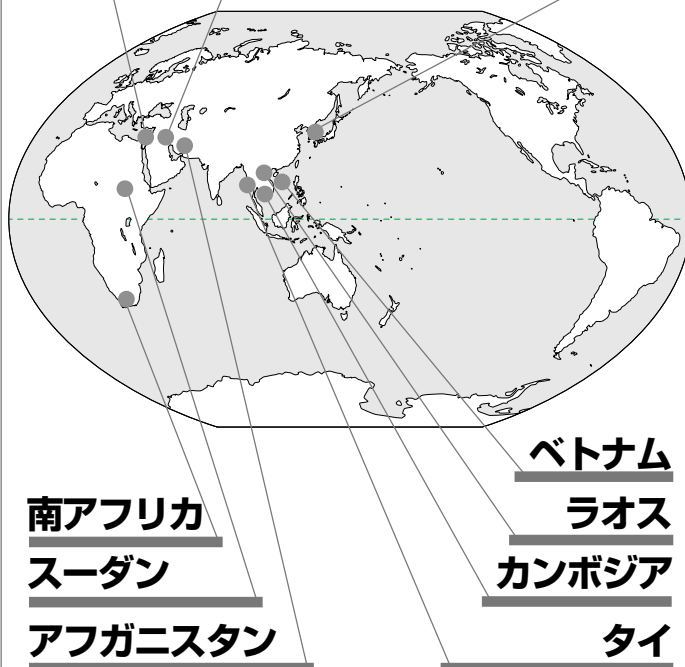


■サマーキャンプで体の仕組みについて学ぶ子どもたち。

## イラク

## パレスチナ

## コリア



## ベトナム

### ■農村開発

北西部ホアビン省でムオン民族の人々と取り組んできた生活改善のための活動は、第1フェーズ延長期を終了。ルンヴァン村とクイッチェン村

ではフォローアップ期間が終了し、貧困世帯の生活改善に貢献した牛銀行や豚銀行について、今後の活用計画が出された。

今後は交流などを通じて他の村がこの2村から経験を学び、各村で活かしていく。こうした村人の行動の変化をさらに確実なものとするために、2年間の活動を計画している。(伊能)

### ■ネットワーク

ハノイに拠点を持つ国際 NGO やローカル NGO、政府関係者や研究者が集まり、活動分野ごとに情報交換を行なう機会を設けている。JVCは「持続的農業・自然資源管理」のコーディネーターを務めている。4月にJVCカンボジアと協力し、カンボジアで広まっている幼苗一本植え(SRI)の技術と実践例について紹介。この農法を実践している農家も参加して経験を紹介した。(伊能)



■ NGO の会合で稲作改善の実験例を報告。

## カンボジア

### ■生態系に配慮した農業による生計改善

小規模農家の生計向上をめざして今年4月より、お金や環境に負担をかけずに収量を上げる農業の研修を中心とした活動をシェムリアップ県で開始。新活動村10村選抜。(米倉)

### ■持続的農業と農村開発 (SARD)

環境保全型農業による食糧の確保をめざす活動。カンダールの5小学校で環境教育。植林とたい肥作り教材作成中。(米倉)

### ■資料・情報センター (TRC)

持続的農業と環境教育の教材を、現地 NGO や農民協会と協力し、4県で農村に提供。(米倉)

### ■技術学校

110名が学ぶ自動車修理訓練校と付設の整備工場を側面支援。移転先建設工事は雨期が始まり埋立地側面処理が課題。移転準備に向け関係者と定期会議を継続。(米倉)

### ■調査研究・政策提言、ネットワーク

カンボジア市民フォーラムによる集合村評議会の選挙監視参加。(米倉)



■農民図書室に教材を配給。村人の関心が高い。

## アフガニスタン

### ■地域医療

#### (ナンガルハール県)

診療所では気温の上昇とともに下痢、マラリアの患者が増加。下痢治療のために経口補水療法（塩と糖を含む水を飲むことで脱水症状を防ぐ）コーナーを設置した。また、マラリア対策の蚊帳300張を周辺村の住民に配布。結核の検査機能を整備し、4月に1例の陽性患者を認めた。

当国では出産に関わる死亡が多いことが問題なため、診療所の管轄区域8ヵ村で出産の調査を行なって対策を練っている。

（藤井）

### ■教育支援（ナンガルハール県シェワ郡）

新方式の教師用指導書を用いて教授法の研修を行なった学校を巡回し、モニタリングと教員への追加指導を実施。（藤井）

### ■政策提言・ネットワーク

日本政府が草の根無償資金を通じてPRT（地域復興チーム、軍民一体の支援チーム）との協力を開始したことを受け、日本アフガンNGOネットワークの7団体が、外務省中東アフリカ局長と意見交換を行ない、PRTの問題点を伝えた。（長谷部）



■診療所で無事に赤ちゃんが誕生した。

## ラオス

### ■森林保全

生活の源である森林を守るため、村の権利の確保を「土地森林委譲」制度を通じて行なっている。4月にブラパー郡ソーイ村、5月にパッパン村で実施。この近隣村同士の問題も協議をもって解決。4月上旬の中間評価では、「土地森林委譲」実施前と後の違いについて語り合われ、森林の価値の見出しや水源保全につながっていることがあげられている。自家栽培している林産物（ラタン）も順調に成長し、栽培研修を予定している。（尾崎）

### ■複合農業・生活改善

十分な食料確保のため、稲作改善、家庭菜園、コメ銀行、井戸建設を行なっている。中間評価の場では、幼苗一本植え（SRI）実践の多くで収量が上がった成果を確認。又、ブンファナータイ村にて経験交流を開催し、13村が参加した。家庭菜園では、キュウリ、カボチャ、豆などの雨季栽培をトライアルで実施する。また、昨年から調査を行ってきたナタンドン村で、コメ銀行の支援を行なう。現在、その規則について話し合っている。

（尾崎）



■収穫量が上がったと語る幼苗一本植の実践者たち。

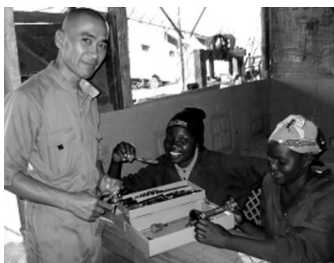
## スーダン

### ■難民帰還支援（南部）

自動車整備工場で元難民の人々へ職業訓練。10名の研修生の内、5人が就職や留学、産休で離れることになったため、追加募集を行なうことにした。当初から計15名に増やす予定だったので、後10名を新規に採用すべく応募者の面接を開始した。現在までに22名の応募があった。6月から新研修生へのトレーニングを開始する予定である。（岩間）

### ■井戸づくり支援（ダルフル州）

西ダルフル州の州都近郊の3村で設置された井戸の視察のため、ジュバから首都ハルツームに出て、ダルフル州への準備を進めた。だが最近、スーダン政府によるダルフル州への渡航許可証の発行が厳しくなっており、結局予定期間内に発行されるのは無理と判明したため訪問は断念した。（岩間）



■トヨタから寄贈された手工具の管理を研修生に任せる。

## 南アフリカ

### ■環境保全型農業

#### (東ケープ州)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。干ばつで主食のトウモロコシが不作だが、この活動の実践

農家では1haあたり5トンと良い収穫の畑もあった。一方、南ア政府の「食糧増産政策」で不作のため農家は借金をして農業代を支払わなければならず、政府に政策変更を求めた。5月には歴史的な寒波に見舞われ、農作物や家畜に被害がでた。（津山）

### ■HIV/エイズ（リンボボ州）

感染予防、在宅介護、HIV陽性者およびエイズで親を亡くした遺児への支援を実施。カプリコーン郡では、新パートナー団体の「Pholoshong（ポロショング）」と戦略計画ワークショップを実施した。また、家庭菜園研修の受講者選定基準や計画作りを行った。ベンベ郡では、家庭菜園トレーナーとして育成された9名が、エイズ遺児やHIV陽性者の家庭で菜園を作る支援を開始した。また、在宅介護研修（8ヵ月）受講者の22名が終了試験に臨んだ。（青木、津山）



■新パートナー団体と活動計画を練る。

## イラク

### ■ガン・白血病医療支援

依然として不足している医薬品を、JIM-NETとの連携で提供。4つの病院の医師からの要請に基づいて隣国ヨルダンのアンマンで購入した抗ガン剤、抗生物質を陸路で病院へ搬送した。バグダッドでは特に治安が悪化し通院に危険が伴うため、遠方の患者には優先的に1ヵ月分の薬を渡し医師が電話で体調を確認しながら治療を続ける方法も取っている。日本国内ではイラクの現状や課題を伝える報告会を実施。(谷山)

### ■国内避難民支援調査

現在イラクでは武力衝突の激化により約170万の人々が避難生活を送っている。受け入れ先がない避難民は寝る場所や毛布なども確保できずに過ごしている。JVCは西部アンバール県ファルージャで活動するイラク市民団体と協働での避難民支援の可能性を探っている。(谷山)

### ■アドボカシー

政府によるイラク特措法の改正案(自衛隊派遣延長)に対して公開質問状を提出。(谷山)



■イラクの現状を日本で伝える谷山。

## パレスチナ

### ■幼稚園児栄養改善支援

牛乳とビスケットを園児500人に提供。5月は母親への栄養・衛生教育や子どもたちの成長測定と血液検査も実施。(小林)

### ■貯水池決壊に伴う緊急支援

3月末のガザ地区ウム・エル・ナセル村の貯水池決壊に伴う緊急支援。ビスケット1箱を約400のテントに支給。(小林)

### ■巡回診療支援

エルサレムの医療NGOによる巡回診療を支援。学校健診を中心に行なった。(小林)

### ■子どもの文化・教育支援

ベツレヘム難民キャンプのハンダラ文化センターを支援。(小林)

### ■収入創出支援

上記センター内の女性グループの刺繍プロジェクトを支援。5月にはエルサレムでバザールに出展、好調な売上。(小林)

### ■アドボカシー

パレスチナ占領40周年のイベントモニター、参加及び情報発信。秋実施予定の宗教間対話に向け参加者と日程調整中。(小林)



■ガザの幼稚園でビスケットを食べる園児たち。500人に届く。

## 調査研究・政策提言

### ■提言活動

#### ◎アジア開発銀行総会

5月6日、京都で行われたアジア開発銀行30周年年次総会に参加。国際NGOのオックスファム・オーストラリア及びアクション・エイドと共催で『ADBと自然資源管理』をテーマにワークショップを主催した。約50名の参加者を集め、ADBがラオス、カンボジア、ベトナムで行なっている開発プロジェクトによる自然資源への影響と住民参加の重要性について意見交換を行なった。また、同じ構成で東京でもワークショップを開催。(※本誌2～5ページもご覧ください)(高橋)

#### ◎参議院ODA特別委員会

5月16日、ODA改革に関し、参議院ODA特別委員会の参考人聞き取りに代表の谷山が出席し、NGOの視点から日本のODAの課題について意見を述べた。住民主体の自然資源管理の重要性、イラクやアフガニスタンで行なわれている軍事主導の平和構築・復興の問題点について意見を述べた。(高橋)

## コリア

### ■絵画交流

今年も6月28日より東京都児童会館にて「南北コリアと日本のともだち展」を開催する。その打ち合わせのため、5月にはソウルの協力団体、6月には平壤の小学校2校を訪問して絵画提供などの協力をお願いした。

ソウルで活動するNGO「南北オリニオッケドンム」とは、絵画展開始当時より作品提供や子ども交流などに取り組んできた。東京での絵画展および9月にオッケドンムが主催する平和絵画展に相互参加することで合意した。

平壤では、市内にあるルンラ小学校およびチャンギョン小学校を訪問した。ルンラ小学校では「日朝関係の悪化の中で、日本で朝鮮学校に通う子どもたちが辛い思いをしているのではないか」との質問があり、朝鮮学校の学生たちがともだち展を通じて出会った日本の子どもと続けて交流していること、意欲的に参加してくれることを説明した。今回の訪朝では、絵の依頼のほか、子どもたちへのインタビューや、学校での様子をビデオで撮影した。この映像は絵画展会場で放映する予定。(寺西)



■日本からのビデオメッセージを見ようと集まる子どもたち。



## 新スタッフ紹介

いまい  
たかき  
今井 高樹

スーダン現地代表



みなさん、はじめまして。と  
はいえ、J  
VCには  
これまで  
もボラン

ティアや理事として関わって  
きたので、私の名前に聞き覚えのある方もいらっしゃるかも知れません。十八年間の会社勤めの後、一年半のアメリカでの教員インターンを経て、このたびJVCスタッフの一員となりました。

JVCのスーダン事業は、帰還難民支援のための自動車整備工場&学校の運営。復興のため不可欠なこの事業を、現地のローカルビジネスとして自立させていくために、私がビジネスの世界で得た経験(経営計画立案や経営管理を担当)を少しでも活かすことができれば、と考えています。渡航前には自動車免許取得のため自動車学校(合宿免許)で大奮闘。無事卒業して、現地に赴任します！

## 国内ひろば

JVC network

みずより  
ともこ  
水寄 僚子

南アフリカ現地調整員



民間企業  
や開発コン  
サルタント  
を経て、J

VCと同じビルに入居している他のNGO団体に関わっている間に、JVCの活動を知ることになりました。

南アフリカやエイズのことを「知る」ことから始まりますが、現地の方々と信頼関係を築いて活動を盛り立てていき、それを通じて日本での暮らしや生き方も変わっていくような学びをお伝えしていければと思います。

## 新インターン紹介

かすが  
みさと  
春日 美里

アフガニスタン事業インターン



高校生の頃にアフガニスタンの戦争と子どもに関する本を読んで以来、興味を持ちました。そして、今年二月に行なわれた代表の谷山さんの報告会をきっかけに、アフガンボランティアチームに参加し、四月からはインターンとして更に深く関わることとなりました。

明るくない話題も多いアフガニスタンですが、そこには私たちと同じように人々が生活していることを忘れず、人々の暮らしの様子などをどこかで伝えることができれば、と考えています。

まつた  
きお  
松下 希和

調査研究・政策提言／インターン



大学生生活最後の一年ということで、学生のうちに興味のあ  
ることをやってみたい、社会経験  
をしたいと思います。

そこで、かねてから興味を持っていたNGOの活動をよく知りたいという思いを発端に、JVCのインターン募集にたどり着きました。

調査研究・ODA改革ネットワーク東京インターンを選んだ理由は、自分が興味を持っていた開発の分野に関係しているからです。特にODAに関しては興味も疑問も持っていたので追求したいと考えていました。これからインターンという自分を活かし、たくさんのことを学んでいきたいと思っています。

すえよし  
末吉 あゆみ

広報インターン



前々からNGOには興味があったのですが、何か関われば  
たらなあと思うだけでなかなか行動にはなりませんでした。

でも「NGOを知るには組織の内部に入れるインターンが一番だろう」というある人の言葉が後押しとなって、参加することになりました。

私がインターンを通してやりたいことは、国際機関、JICAなどに並んで国際協力に従事しているNGOとは何なのかを学び取ることです。NGOについての情報はたくさんありますが、自分の目で、NGOで働いている人はどんな人で、何を考えているのかを知りたいと思っています。

わかばやし  
ななめき  
若林 直志

会員担当インターン



高校時代から国際関係に興味があり、大学に入ってから  
学生主体の国際NGOに参加  
しました。モンゴルでの植林

活動を主軸に、政策提言もしているNGOです。年二回のスタディーツアーで現地を訪問し、現地の人々と触れ合ったことに達成感がありました。

しかし、専門的知識はない、大学四年間しか携わることができない、などという学生主体ゆえの弱点も見えてきました。そのような経験から、専門スタッフもいる基盤のしっかりしたNGOで学んでみたいと思い、インターンに応募しました。この機会に、現地の活動やNGOの体制など、私の人生の糧になるように多くの事を吸収したいと思っています。

## 募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。  
JVC への募金は税の優遇措置を受けることができます。

### ① JVC 募金

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

3月計 2,525,663 円

4月計 779,336 円

|         | 3月         | 4月       |
|---------|------------|----------|
| 無指定     | 481,580円   | 401,486円 |
| タイ      | 50,000円    | 0円       |
| カンボジア   | 1,000円     | 0円       |
| ラオス     | 116,000円   | 236,500円 |
| ベトナム    | 101,000円   | 6,350円   |
| 南アフリカ   | 27,000円    | 25,000円  |
| パレスチナ   | 216,250円   | 86,500円  |
| アフガニスタン | 1,411,016円 | 9,500円   |
| コリア     | 2,000円     | 2,000円   |
| イラク     | 113,817円   | 2,000円   |
| スーダン    | 0円         | 0円       |
| その他     | 6,000円     | 10,000円  |

### ② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

3月計 237,600 円 / 25 件

4月計 324,500 円 / 21 件

### ③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

3月計 1,364,000 円 / 1,215 件

4月計 1,377,400 円 / 1,219 件

## 編集後記

6月上旬は、A代表、なでしこ、U-22と各カテゴリの試合がめじろ押しだった、とはいえ心踊らない。修羅場をくぐり抜けて本当に強くなりそうな予感を、今のA代表(の延長線上)に「まだ」感じられないからだろうか。93年米予選、97年仏予選、04年アジア杯(結果オーライ気味だが)のようなシビレル場を乗り越えてくれそうなのは、能活、闘莉王、中澤、阿部、遠藤、高原だけ。「日本化」はまだまだ道半ば。(H)

福田 直美  
ふくだ なおみ



パレスチナ現地調整員

「どうしてこの仕事をしているの？」と聞かれると、いつも簡潔に答えることができます。イスラエル・パレスチナ問題に関わっていききたい、パレスチナの人々の運命に惚れてしまった、世界で起きている「間違っている」ことを少しでも変える力になりたい：などなど色々思うことあって、ずっとボランティアチームで活動してきました。でもやっぱり私をここにひきつけられてしまうのは、関わっている人がとても魅力的だからなんだなあ、と思います。日々、スタッフ、ボランティアの方々、ご支援くださる方々、そして現地の人々から学び、励まされることばかりです。

目の前には小さな目標がたくさんありますが、その先の目標は、より多くの人がそれぞれの立場から参加できる国際協力をつくっていくこと。それぞれが持つ思いをつなげていけるよう、パレスチナと日本とのつながりを大切にしていきたいと思っています。

## 2008年G8サミットNGOフォーラム 代表に星野昌子さんが就任。



来年、日本で「主要国首脳会議」(G8サミット)が開かれます。これに先がけて、今年1月に日本のNGO約80団体が参加する「2008年G8サミットNGOフォーラム」が結成されました。このフォーラムは、日本で開催されるG8サミットにおいて、地球規模の環境問題、途上国の貧困問題の解決と開発、人権の確立や平和の問題について、各国首脳が市民の声を反映させながら真剣に討議し、有効なとりくみを約束するよう、働きかけることを目的としています。

そしてこのたび、このフォーラム代表に、JVCの理事でもある星野昌子さんが就任しました。星野さんは、6月6日から開催されたドイツでの今年のサミットの現場にも足を運び、このサミットで中心となって提言活動を進めてきたドイツのNGOから、来年度への課題を引き継いできました。

なお、同フォーラムでの議論は非常に多岐にわたるため、「貧困と開発」「環境」「人権と平和」の3つのユニットが設置されています。JVCは「人権と平和」のユニットに参加して、主に紛争地での現場経験を基にした提言を行なう予定です。

異なる分野のNGOが集って地球規模の課題に取り組む、新しい枠組みとなるこのフォーラム。星野さんにはそのまとめ役としての活躍が期待されます。どうぞ星野さんへの応援と、NGOフォーラムへのご理解をよろしくお願いします。

※ G8サミットNGOフォーラムについての詳しい情報は、国際協力NGOセンター(JANIC)のウェブサイトをご覧ください。

→ <http://www.janic.org/>

会員専用ページパスワード (7~8月) →→→

H7rSPwe38v

※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&Eのバックナンバーを順次公開中です。現在、この作業を手伝って下さる方を募集中。細野までご連絡を！

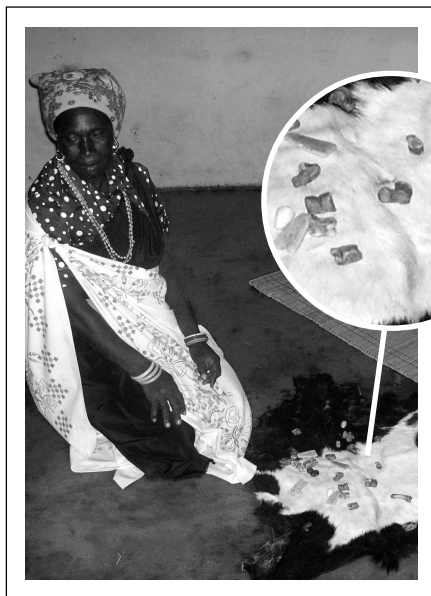


# 暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

80

South Africa



## 信じる力

南アフリカの農村地域では、伝統療法を信じている人が多くいます。  
動物の毛皮を床に敷き、その上に壺から出した動物や魚の骨をさっとばらまきます。  
広がり方からいろいろ読み取って、運勢を占ったり、病の原因を探ったりします。  
(南アフリカ、リンボボ州にて撮影)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

### ■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ [s-tera@ngo-jvc.net](mailto:s-tera@ngo-jvc.net)

会員数(6月9日現在) 合計 1,346人  
(正会員 642人 賛助会員 704人)

### ■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。  
(無料。予約不要です)

第1月曜日 午後7:00 - 8:30

第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30

※会場はJVC東京事務所です。

### ■E-mail

[info@ngo-jvc.net](mailto:info@ngo-jvc.net)

### ■ホームページ

<http://www.ngo-jvc.net/>

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。  
※本誌は再生紙を使用しています。